



審査員講評



【絵画部門】

講評:酒井 昌之 氏(一水会常任委員、県展運営委員)

◆市長賞 『 36. 南湖の紅葉 』 岡部 イミ子 さん

秋の紅葉の^{けしき}景色を整理をして描き、スケールの広い自然が表現されています。樹木の構成に工夫がされて奥行ある表現が出来ています。白河のすばらしい自然の豊さを改めて感じさせてくれる絵です。風景画の縦木の配置と色彩の変化が効果を大きくした秀作です。

◆教育長賞 『 20. 森の王者(奇形樺) 』 生駒 志賀 さん

印象に残る巨木の強い作品です。丁寧な観察と描きこみで、ボリュームと迫力ある秀作です。上部の幹の工夫と色彩変化で深まりが増しています。感動を与える構図で明解に整理されて色彩豊かに描かれています。

◆教育長賞 『 35. 椿 』 鈴木 伸明 さん

画面全体にある緑葉の中に咲く椿の赤い花が生々と鮮かに描かれています。花びらの柔かな質感が工夫された表現で効果を上げています。深味のある色彩には塗り重ねの効果が活かされています。細部まで注意して描かれた緊張感が伝わって画面に吸いこまれます。テーマを絞って、次作を期待します。

《 総 評 》

全般的に意欲ある作品が出品され、新鮮な感覚で描かれた作品が目立ちました。風景画の作品には主観的にとらえた秀作が出品され今後が楽しみです。確かな技量を感じる作品が増し、類型的作品が少なくなり、自己の表現が出来ている作品が増していると感じました。

感動ある力強い作品に出会えて新たに試みる勇氣と希望をいただきました。

種々の表現法のあることを知り、制作の楽しみをもっと深めて、熱気を感じる画面を期待いたします。



【彫塑工芸部門】

講評：近藤 学 氏（現代工芸美術家協会理事）

◆市長賞 『 12. 焼締花入 』 甲賀 京子 さん

大きさとフォルムのバランスが良く、薪を燃料とした穴窯での焼成は、大変な作業となりますが、多くの薪を長時間にわたり焼き続けることにより器に掛かった灰がすじ状に流れた様は、見事な景色となっている。

◆教育長賞 『 22. 座卓灯籠 』 新井 龍河 さん

全体に施した彫りが、繊細さと大胆さをあわせもった大作で、座卓として使いながら池の風情を感じられる楽しい作品に仕上がってます。

《 総 評 》

バラエティーに富んだ作品が多く出品され、楽しく審査をさせていただきました。

工芸は、技術が伴わないと思う様な形に仕上げることはできませんが、自由な発想と高い技術力で制作された作品や、伝統を重んじた焼き物や彫り物に優秀な作品が多かったと感じました。

今回は、出品数が増え大変喜ばしいことです。更に多くの作品に出会うことを期待しております。



【書部門】

講評：遠藤 昌弘氏(日展会友)

◆市長賞 『 12. (臨)蜀素帖 』 石田 陽菜 さん

2尺7尺縦額装、薄黄染紙。行書の著名な古典である米芾(べいふつ)『蜀素帖』冒頭一節の臨書作品。2尺7尺の大紙面に、十五字を二行書きした。その大胆な運筆と筆力は、見るものを圧倒する。米芾は、中国歴代の書家の中でも随一のテクニシャンとして定評があるが、『蜀素帖』はその代表作といえるものである。しかしその真意を得ることは困難であり、真正面から臆することなく取り組んだ姿勢を高く評価したい。また書き始めから最後の落款にいたるまで一気呵成に仕上げられ、よく集中できたことも作者の力量といえよう。日ごろの鍛錬が背景にあることは、作品が雄弁に語っている。今回の最優秀作品とし、次回作に期待したい。

◆教育長賞 『 10. (臨)王鐸 』 湊谷 暁雲 さん

2尺6尺縦額装、行書四行。王鐸(おうたく)は中国明朝末から清朝にかけて活躍した人物である。多くの書例を残しているが、とくに文字を続け書きする連綿による草書(おもに王羲之臨書)と、単体の行書(おもに自詠詩)に見るべきものが多い。本作は、王鐸の行書作品の臨書である。臨書は、学書のために欠かせないものであるが、それを自分のものにして表現に結び付ければ、“ものまね”を脱却して自己と表現になる。本作は、王鐸の行書表現の特徴をよくとらえ、自分のものとしている。2尺6尺という紙面を十分に活かした構成力も秀逸である。王鐸のもつ生命感、線の充実を自己のものとした、その真摯で熱心な態度も評価したい。

《 総 評 》

一般の部は、漢字書・仮名書があり、また創作・臨書があって、それぞれに表現を持った内容であった。多数が額または軸作品であるが帖作品もあって多様な表装を見ることができた。漢字書は、臨書・創作ともあったが、臨書は安定した作品表現となっていた。創作では、技法の優れたものが評価された。今回、優れた臨書作品で受賞候補となったものの、誤画を指摘されたものがあった。ぜひ制作にあたっては身近な先生や先輩にアドバイスを受けてほしい。仮名書は、細字・中字があったが秀作は少なかった、次回に期待したい。

高校の部は、全作品が臨書で、いずれの作品もレベルは高い。その差は僅かといえるが、古典に対する熱心さが作品にも表れているように感じた。また2尺7尺の大作に挑戦するものもあることは、頼もしい限りである。

書の作品は古典の習得であり、また対決でもある。自己満足に堕することなく、つねに格調の高さを目指すものであってほしい。

【写真部門】

講評：丹野 清志氏(写真家)

◆市長賞 『 25. 光彩の嶺 』 小針 敏行 さん

写真の魅力は光であると言われますが、小針さんの作品を見て最初に感じたことは光の魅力です。まさにこの光の一瞬との出会いを求めて小針さんはこのシーンと向きあったのだと思います。光が作り出すドラマの中から切りとった作者の緊張感がぴりりと伝わってきます。「山の風景」として見ると、光る嶺とただよう雲、そして広がる森のバランスが的確に選択されていて、それがキリッと画面を引きしめているという感想になるかと思いますがこの作品の強さは、山をいかに撮るかということ以前に光をいかにとらえるか、という感性のシャープさあります。

◆教育長賞 『 26. 厳冬 』 水野 晴夫 さん

このシーンと向き合っていた時の水野さんの張りつめた緊張感を感じます。寒さ、冷えなどなく体は“熱く”ほてっていたのかもしれませんが。モノトーンの中に、まさに厳冬の空気感が表現されています。特別かたちが面白い木ではなく、それがかえって魅力的で、ムダなく切りとられた構図をより印象深くしています。いわゆる“絶景”ではありませんが、“かたち”で見せてしまう絶景より、ごくありふれた身近にある風景の中に写真の素材があるのだと思います。スケールの大きさを求めると、とかく被写体に寄りかかってしまうものです。“小さな風景”に自分の世界を見つけてください。

◆教育長賞 『 31. 不思議の森 』 佐川 豊次 さん

題名通り“不思議”です。さて、この作品は何を見ればいいのでしょうか。森の中にある玩具はこの場にあったものなのか、演出として取り付けたものなのか、という疑問がわくと思うのですが、そんなことはどうでもいいことで、見る人はこのシーンからそれぞれの物語を作り出していけばいいのです。色づいた紅葉とさびたスコップは、玩具が作り出す世界を盛りあげてくれる要素として見えてきます。誰が見ても分かる写真というものはもちろんありますが、非日常的なシーン、異世界ともいえるシーンのほうに、見る人の心をゆり動かすことが多いものです。

《 総 評 》

今年の選で嬉しかったのは、高校生たちの作品にふれたことです。鈴木君の作品「ゆきとまつ」のシーンには若さを感じました。バスを待っている時の気持ちが伝わってくるという感想とともにこの作品の良さは、写真の風景としてとらえているところにあります。写真は被写体を説明するとつまらなくなります。若い感性が切りとる世界を楽しみにしています。AI 機能搭載のスマートフォンが日常のツールとなっている今日、プリントで見せる写真よりスマホの高画質画像のほうがインパクトが強いかもしれません。が、音楽を聴いて感じる「余韻」のようなものは薄いと思います。いま、表現としての写真に求められているのは、被写体をどう撮るかではなく、「私」が心に感じた心の表現ということになろうかと思うのです。「型」におさまらず、思いのままの世界を撮ってください。